

在宅で看取る

最期はどこで、誰と
過ごしますか？

著
葉
四枚



NOV.22 - 1983.

文：puffpuff
表紙画像：義父、落葉

なんとしても自宅で最期を

2012年6月2日大切な家族の一員、シーズー犬のショーンが亡くなった。15歳のお誕生日だった。

亡くなる数週間程前息が苦しそうなショーンを動物病院に二晩入院させたことがある。そのときの後悔を今でも引きずっている。動物でも人でも、家族の元で、住み慣れた自宅で最期は迎えるべきだ。そう決意した。

決して決して病院のベッドで管に繋がれて最期を迎えてはいけない。私の気持ちの中では、それは非人道的にも思えるくらいあってはならないことだった。

ショーンが亡くなった同じ年の11月2日、末期癌を患っていた母を階下の母の部屋で看取った。癌細胞に体を蝕まれ、その上腸閉塞で全く食事を取れなくなって2ヶ月後のことだった。食事が喉を通らなくなって緊急入院した母の最期が近いと医師に告げられた。「もっと良くなってから家に帰りたい」と言い張る母を医師に説得してもらってなんとか家に連れて帰った。その後僅か2週間ちょっとで昏睡状態に陥り息を引き取った。

2013年1月30日、アルツハイマー病と心臓病を患っていた義母が他界した。心臓肥大でゼーゼーと苦しそうにしている義母が入院してペースメーカーをつける手術を受けた。入院中の生体検査でアミロイドーシスというタンパク質が原因のアルツハイマー病、心不全とわかったが、もうあまり先はないという医師の説明だった。ペースメーカーで呼吸は楽になった筈の母もアルツハイマー病が進行し、私たちを見る目にも表情がなくなった。お正月は家で義父と一緒に向かえさせてあげたいと、これも医師に頼み早急に退院することになった。12月の中頃から1月30日まで一ヶ月半の間、自宅（やはり階下）の義父の隣で過ごして貰うことができた。最期は食が細り生きる意欲を失ったようだった。

同じ年、12月28日、義母の後を追うように認知症の義父が他界した。98歳9ヶ月、最期までなかなか難しい人だった。義父の生命力には驚かされることが多くあった。いったい何度救急車で病院に搬送されたことか、夜中や明け方は息子である私の夫が車で病院に連れていった。その度に、こんなことはもうないだろう、と思っていた。結局亡くなる前の一ヶ月間に3回もの危機を脱した義父だったが、とうとう最期は食べ物を上手く呑み込むことができなくなり、呼吸不全で息を引き取った。

人も犬も最期は食べることが出来なくなる、言い換えると、食べられなくなったらそれ以上は生きられない。どんなに生命力があっても、どんなにもっと生きたいと願っても体が食事を受け付けなくなったら終わり。皆を看取ってこの当たりまえのことを、もう一度考えさせられた。生きるということは食べるということ、食べたいと思うことは生きたい証などと。

末期癌

同じ家の1階と2階に住んでいたのに、何故もっと早く気がついてあげられなかつたのだろう。若い頃から大きな病気もせず、飼っていたワンコを連れて毎日楽しそうにお散歩をしている母が病気になるなんて考えもしなかつた。2年前のちょうど今ごろ、ゴールデンウィークで仕事が休みの私に母が病院へ連れて行ってくれと頼んできた。

病院ではすぐにいろんな検査が行われた。そして出た結果を元に医師からの説明を受けて呆然とした。このまま何もしなければ3ヶ月の命、抗がん剤などの治療をすれば延命できると。治療をするためには母に本当のこと（癌であること）を伝えなければならない。伝えないと癌治療をしなければたつた3ヶ月あまり。自分の親のことなのに、子供である私と妹に責任の重い選択が与えられた。

母は気丈なところがあつたので、そしてたとえ一年でも延命して欲しくて事実を伝えた。たださすがに末期癌とは言えない。医師の上手なウソの説明に合わせて、末期癌のステージの一つ前の段階ということにしておいた。母なら頑張って治ってみせようとする筈、そう思った。暫く入院した後、抗がん剤治療を通院に切り替えてもらい夏に退院した。それからあっという間に髪が全部抜け落ちた。治療で点滴をした後は数日辛そうにして殆ど食事も取れないでいたので、どんどん痩せ細って行く母が不憫でならなかつた。そのころの母は、「また以前のようにおいしい食事がしたい」「何を食べてもおいしくない」が口癖だった。

抗がん剤治療を続けていても、母の体の中では癌が進行していく、卵巣から広がつた癌細胞が腸や腹膜のあちこちに散らばつてゐた。腹膜藩主という病名で、もう治せないほど癌細胞が散らばつてゐる状態らしかつた。おそらくその癌細胞が腸壁や胃を圧迫して、それで食欲がなかつたのだろう。何を作つて持つて行つても、食べる事が苦痛のようだつた。そして年末が近いある日、とうとう腸閉塞を起こして入院した。それでも持ち前の元気ですぐに退院できたので家でお正月を迎えることができた。それから暫くは食事もなんとか取れ、髪の毛も元通り生えて、このまま元気になつて数年、或は奇跡が起きて、もっと長く生きられるんじやないかと思ふほどだつた。今となつては母の回復ぶりが返つて癌細胞を元気にしたんじやないか、そんなことを考へる時がある。

元気そうでも血液中の癌を示す数値がどんどん高くなつて行つた。そのことを受けて、医師から選択肢が三つあると言つた。一つ目は、このまま何もしない。二つ目は、前回と違う抗がん剤投与を再開する。三つ目は、癌摘出手術をする。なんとしても治りたい母の選択は手術だつた。7月終わりに手術を受けた。摘出した癌細胞を見せてもらつて大きさに驚いたが、腹膜に散らばつた小さな癌細胞全てを取りきることはできなかつたらし。大変な手術を受けた82歳の母はどんどん元気になり、自分でも早く退院したいという表情をみせるようになった。手術後僅か2

週間で退院することができたが、体に残っている癌細胞のことを考えると、この先どうなるのだろう、大きな不安をかかえていた。

初めての看取り

手術を受けた母が少し元気を取り戻したように見えた矢先、9月始め、母に呼ばれて階下に下りて行くと、朝から食べたものを吐いて苦しそうにしていた。病院の救命救急センターで診てもらい急遽入院することになった。

それから10月の中頃までの入院生活は本当に惨めなものだった。また腸閉塞を起こしていた。固形物を食べることはできないので、お茶やジュースなど飲んで胃に入ったものは腸に流れて行く前に抜き取ってしまう管が片方の鼻から外の袋に繋がっていた。何を飲んでも次の瞬間には管から流れ落ちて掛けてある袋に溜まる。もう二度と食べることはできないのだと、あまり先がないのだと感じた。それなら余計に家に連れて帰らないと、残された時間を家で過ごして欲しい。医師から何とか母を説得して貰い退院することになった。退院してから亡くなるまでの3週間は往診の先生や訪問看護士の方に本当に良くしていただいた。看護をしながらいろんなことを学んだ。ベッドに寝たきりの人の介護のやり方が一通りできるようになった。胃から出た液体を毎日2回トイレに捨てて綺麗にした。鼻から延びる管は常に寝ている母よりも低い位置に、ベッドの下方にぶら下げておく。管が詰まても大変なのでドロッとした液体をあげるわけにいかない。命綱の点滴液も一日2回私が交換した。

亡くなる一週間ほど前、母が寝るベッドのある隣の部屋で往診の先生の話を聞いていると、ベッドからじっとこちらを見ている母に気がついた。本当のことが言えずに後ろめたい気持ちでいた私は、その時も母に何も言葉をかけてあげることができずに、先生の話を聞くふりを続けた。その時の母の、全てを悟ったような目が今でも忘れることができずに、どうしてあげたら母の気持ちに寄り添うことができたのか、どの言葉を使ったら良かったのか、本当のことを言うべきだったのか、など今でも答えが見つからずにいる。

最期の3週間は慣れないで手つきで母の世話を一生懸命した。それでも、もう終末期だから最期が近いとはとうとう言えずにいた。家で母の嬉しそうな顔を二度と見ることはなかったが、病院でなく自宅に連れて帰って良かったんだと今でも自分に言い聞かせている。

私に心配をかけまいと最後までモルヒネを使うこともなく、痛い、辛いと訴えることもなく、じっと耐えていた母。どうしてあげることもできずに、その時をただ待つしかない私だった。在宅で看取るということは単にオムツ交換をしたり、着替えを手伝ったり、食事を作ったり、そういうもろもろのことではなく、何かもっと心にずっと重い責任感のようなものかも知れないな、そう感じていた。

アルツハイマー病？

自分の母の看護をしながら、階下の真ん中を挟んで反対側に住む義母の様子が変だと思うようになった。用事があつていつ階下に下りて行っても義母はソファーで寝ていることが多くなった。以前から肥満気味の義母は心臓病を患っていたせいで、生活は家の中が殆ど、買い物やお散歩に誘ってもなかなか行きたがらないところがあった。そのことが加速されたようにいつも家でじっとしている。あんなに大好きだった読書も進まなくなったり寝ていることが増えた。「私は食いしん坊だから食事を作るのは苦にならないのよ」そう言っていた義母が何をするのも面倒そうな顔をするようになった。このまま行ったら認知症にならなくても充分寝たきりになってしまう....

あるときお漏らしをするようになった。おかしいな、羞恥心が人一倍ある筈の義母がお漏らしに気づいていない。ましてや私が後始末をしていても気に掛けていない様子だった。女性だから尿取りパッドを付けてもらっても大丈夫と思ったのは大失敗で、トイレで流して詰まってしまい、業者を呼ぶなど大変なことになったので、それからはなんとか説得してパンツ型のオムツを付けてもらうようにした。仕事や買い物など私が家を空けるときは、私の看護を必要とする私の母、1人ではお茶を入れることもできない義父、その頃はもう台所に立って火を扱うことができない義母、3人の気がかりを常に背負って外出していた。とうてい私1人では3人の全ての面倒を見ることはできないので、義父母のほうは介護認定を取って毎朝と夕1時間ずつヘルパーさんに来てもらい食事の介護をしてもらった。

アルツハイマー病には良い時、悪い時、の波がある、普段一緒に生活をしていない人が良い時だけを見ると、それまでと何も変わらなく思えるので、まさかアルツハイマー病だなんて思えない。あれ？ どうしたのかな？ 変だな？ そんな小さな変化が分かるのは一緒に住んでいるから。一人暮らしの老人のそんな変化に誰が気づいてあげられるのか.... 私のところは皆がまだ元気な時に3世帯住宅を建て、それぞれが独立して暮らせるような家の作りにしてあった。独立と言っても実際は同居なので親にはいつ何があっても、2階に私たちが住んでいるから大丈夫という安心感を持ってもらうことができた。年を重ねるに連れて誰しもいろんな不安が出てくるもの、子供のいない老夫婦だけの世帯、一人暮らしを余儀なくする高齢者世帯であったらなおさら明日のことが不安になると思う。

テレビの方を向いた義母の食事をする手がピタッと止まったまま動かない。もういいのかと声をかけると、「いただきます」と言ってまたゆっくり口に食べ物を入れる。台所を片付けながら目に入る義母の後ろ姿から、少しずつ病気が進んでいるのがわかった。もともととても穏やかでやさしい人柄の義母は私に対して暴言を吐いたり、怒ったりといったことは全くなかった。膝が悪く外出も嫌いだったので徘徊も全くなかった。なのでアルツハイマー病とわかってからも大変だと言われているようなことはなく、身の回りの世話をえすれば、それ以外に徘徊や排泄で

困るようなことは起きなかった。それよりも、義母と話をしていると以前のようにニコニコとして返事をしてくれるので、いったい義母は自分の病気のことをどれほど解っているのだろう？悪い時は、何も記憶に残らないかも知れないけれど、良い時は、もしかしたら少し解る部分があるからこそ、良く言われるように、自分の病気を隠そうとして普通に話してくれるんじゃないか、そんなことも考えた。

最期は在宅で

私の母が亡くなつてそのことを義母に伝えたが全く反応がない。それどころか出棺を控えた日、最後に会つてお線香を上げて欲しいと言つたところ、軽い認知症の義父はすぐに最後の別れをしてくれたが、義母は、「私は嫌だ」の一点張りだった。きっと悪い時と重なつて義母は理解できないでいたと思うと、なんとも切ない。薬で進行を遅くすると言つても、そこまで進んではもう先が長くはないだろうと覚悟を決めざる終えなかつた。実際義母は機嫌が良さそうな日と悪そうな日があつて、やはり言わわれているように良い時、悪い時、の波があるみたいだつた。

母の葬儀を済ませて2週間ほど経つたある日、義母が苦しそうに咳き込んだことがあつた。以前から往診の先生に、義母の心臓肥大はいつ何があつてもおかしくない状態、と聞いていたので、その時も先生に往診を頼み、急遽入院してもらうことになつた。入院先の病院の医師の勧めでペースメーカーを付けたらずいぶんと呼吸は楽そうにしていた。同時に生体検査で、アミロイドというタンパク質が体のあちこちに付いて機能しなくなるアミロイドーシスという病気だと解つた。医師のもう先は長くないという説明に、私たち家族は、一日も早く退院してもらい、在宅で最期を迎えてもらひます、という決断を伝えた。入院して一ヶ月後の12月終わりに近いある日、自分の置かれている状況を全く理解できない義母を家に連れて帰つたのは、11月の初めに亡くなつた自分の母の納骨を岡山で済ませ、川崎の自宅に戻つて來た翌日のことだつた。

それから1月30日に他界するまで、自宅の義父の隣に並べたベッドと食卓を行き来する生活が始まつた。何かしたいことや食べたいものがあるかと聞いても、首を横に振るだけの義母はだんだん食が細り痩せて行く。以前から痩せたいと思っていた義母がこんな形で痩せて行くのを見るのは皮肉なものだと思えてくる。亡くなる10日ほど前だったか、食べ物を呑み込むことが上手くできなくなつてゐたので、甘いものが大好物の義母に柔らかいケーキを買ってきてお昼ご飯に出した。久しぶりに「おいしい」と言い全部食べててくれた。その日は良い時だつたのだろう。顔も穏やかで、私の話に耳を傾ける義母は以前と変わらない。そんな時は私の方を見て、「申し訳ないわ、面倒をかけて、」と言つたような目でこちらを見つめていた。

お正月を義父と私たちと一緒に迎えた義母は1月30日に他界した。退院して約一ヶ月半、夫の隣で眠つたり、息子に車椅子に載せてもらつたり、まるで1人では何もできない赤ん坊のように皆に世話をしてもらひながら最期を迎えた。自分の置かれている状況が把握できないアルツハイマー病の母であつても、良い時があつた。何もかも分からなくなつて、息子や娘の名前も忘れてしまうと言わわれているけれど、本当にそうだらうか。2年程前に気づいた小さな変化のよう、毎日一緒にいると表情の違いを見逃すことはない。だから良い時があつたことは確かだ。アルツハイマー病で無表情の義母ではなく、「おいしい」と言ってくれた義母の顔が私の心に残つてゐる。

兵隊さんが

義母が亡くなった日、隣のベッドにいる義父にそのことをどう伝えたら良いものか、何度も何度も義母の病気や入院について話したことがあったが、すぐに忘れてしまう。認知症の義父の中では義母はいつまでも元気な妻でいたようだから。義父を義母の眠るベッドの横に連れて行くと、義父は義母の名前を呼びながら大泣きをした。それから、同じ年の暮れに義父が亡くなるまでの11ヶ月間、私は義父の介護に明け暮れた。母、義母、義父、3人の面倒をいっぺんに見ていた時よりも、義父1人の介護に追われる毎日は精神的に辛い日々だった。

朝は、オムツから漏れた大量の尿や大便は決まってパジャマまで汚していたので、まず全部着替えてもらうことから始まる。食欲旺盛な義父は3度の食事を楽しみにしてくれていたので作りがいもあったし、毎回の完食には感心するほどで、後片付けも楽だったが、その分排泄の量も半端ではない。食事や排泄の世話は生きている以上当たりまえだし、むしろ食欲があればこちらも安心していられたものだ。ある朝、夢でも見たのか、「兵隊さんがたくさん並んでこっちを見ている」「誰も助けに来ない」などと一生懸命話をするので、いくら私が、それはきっと夢でしょう、と言っても、そこにいるだろう、見えるだろう、と譲らない。同じ話が一日続くこともあった。どうやら幻覚を見ているらしく、「誰かの顔が見える」「大きな虫が天井を這ってる」などと聞くと、幻覚と分かっていても気味が悪く、夜は私一人で話相手をするのはちょっと嫌だった。

とても痛がりの義父が、どこも怪我等してないのに痛い、痛い、と大騒ぎをした時は、私が少しきつい口調で、「お父様、我慢なさいよ」と言うと、医者を呼べ、救急車を呼べと余計に大騒ぎをして困らせた。そんなことが何度も何度もあった。甘えん坊で我がままな人の世話がこんなに大変とは思わなかったが、大正生まれの、「男子厨房に入らず」時代を生きて来た義父だから仕方のないことと諦めるしかなかった。あまり痛いと騒いだある日、往診の先生を呼んで診てもらった時も先生は首をかしげるばかり。当の本人は先生が診てくれた安堵感からか、ニコニコしながら帰り際の先生に手を振って見せた。アルツハイマー病のように、老人性認知症の義父にも良い日と悪い日の波があったようだし、一日中眠り続ける日があったり、夜中まで起きて暗闇で目をぱちり開けているなど、生活のリズムが狂うことよくあった。

ある時、義父の尾てい骨の赤くなった部分の皮膚が剥がれてしまっていた。数年前に老衰で亡くした犬の腰や頬にできていたのと同じだった。褥瘡（床づれ）はとても痛々しく処置をしていてもどんどん広がって行く。毎日大きなポケットのように開いた穴をお湯で洗い、薬をつけてガーゼで蓋をする。さぞかし痛いだろうと思って、義父に痛くないの？と聞いてもあまり反応がない。それどころか、なんとか横向きに寝てもらおうと背中にクッションをあてたり工夫をした私たちをよそに、5分も経たないうちにちゃんと上向きに寝ている義父を見て微笑ましくもあったけれど、看護士さんや私は困ったものだと頭を悩ませたものだった。

先の見えない不安

義父は一週間に一度のデイケアを楽しみにしていた。もともと絵を描くのが得意な義父は折り紙や塗り絵など楽しんできたようだった。旺盛な食欲は変わらず、ときどき昼夜逆転することがあっても、良く寝て良く食べてくれていればこのまますっと長生きをしてくれるんじゃないかな、と思って安心していたある日、たまたま往診の先生の診察で軽い肺炎を起こしているようだとわかった。もう歩けなくなっていた義父を病院に連れて行くには救急車を要請するしかなく、けたたましいサイレンをならしながらやってきた救急車に義父をお願いした。救命救急センターでレントゲンなど検査をしてもらうと、軽い肺炎なので家で点滴を続けてくださいとのこと。数時間後に帰ってきた義父はとても元気そうに見えた。呑み込む力が弱くなった高齢者は簡単に誤嚥性肺炎を起こすのでその後も気をつけなければいけなかった。ところが僅か一週間後、今度は脳梗塞を起こした。その日はいつも通りお昼ご飯をベッドで取り横になって少しすると足に痙攣がきた。痙攣は全身に広がり、お父様、お父様と呼んでも反応がない。ただごとではない症状に先生と看護士さんに連絡を入れた。待っている間も義父の両目は片方に寄ったまま動かない。もうダメだと思ったので身内の者に連絡を入れた。看護士さんも義父を診るなり脳梗塞を疑い先生に電話で指示を仰ぎ、点滴を開始してくれた。皆が義父の回りに集まっていよいよ最期だと覚悟を決めて見守る中、なんと義父は目を覚まし何事もなかったようにニコニコしてこちらを見ている。やっと都合をつけてかけつけてくれた先生もこれには驚いた。本人はいつものように目が覚めたという顔をしている。なんと生命力の強い人か。そしてまた一週間後、私が仕事で家を空けている間に義父は生死をさまよった。ちょうど手伝いに来ていた義理の妹が一人で義父の傍についていた時、義父の血圧が急に下がり始め、このまま何もしなければ持ち直すことはないという医師の説明に、妹は点滴に一途の望みをかけてみるという判断をした。普段からその時が来たら延命はしないと家族で決めてあったが、娘として、一日でも一時間でも父に長く生きていて欲しいという心情を察すると当然のことだし、それで義父がまた元気を取り戻してくれたので良かったと思った。

それから2週間ほど義父はまた以前のように元気でいてくれた。肺炎、脳梗塞、血圧低下、3度の危機を脱した義父の生命力にただただ感心するばかりの私だったが、いつもの介護に戻ったときの何とも言えない重苦しい気持ち、この先いつまでこんなことが続くのだろう、と不安はつのるばかり。一生懸命面倒を見る私に、看護士さんの一人が、「大丈夫ですか」と聞いてくれた。それまで誰にも言えずにいた気持ちに、その時初めて自分で気がついた。胸が詰まって涙が溢れそうな思いをこらえて、「大丈夫、がんばります」とだけ答えた。

3度の危機を脱した義父も最期は呑み込むことができなくなり呼吸不全で亡くなった。それでも亡くなる日の朝までなんとか食事を取ることができた。亡くなる数日前は朝からご機嫌で、「アイスクリームが食べたい」「うなぎが食べたい」「コーヒーが飲みたい」などと訴えるので、私がその都度用意をしてベッドに運んで行くと、嬉しそうに食べながら満足そうな笑みを返してくれた。

れた。以前の義父のように、食事を取りながら冗談も交え私たちとの最後の会話を楽しんでいるようだった。こんなに嬉しそうな義父は何ヶ月ぶりだろう、まるで小さな子供みたいな屈託のない笑顔がずっと心に残っている。

在宅で看取ること

人も動物も自分の死が近づくと本能的にわかるんじゃないかと思う。その時をどこで過ごした
いか、誰といたいか、答えは皆同じではないか。介護用ベッドを置く部屋がないとか、同居でな
いので面倒を看たくても叶わないとか、物理的なことはさておいて、人は最期に何を望むのだ
ろう。介護する側も後悔を引きずらないためにどうしたらいいのだろう。

私は、一匹のシーズー犬をたとえ2日でも病院に預けた後悔を今でも引きずっている。犬のこと
で何を言うかと思う方も多いと思う。でも犬は口がきけない、従って理屈でなく感情だけで飼い
主と繋がっている。こうして欲しいと訴えるとき目を見てワンワンと吠えるしかない。病院のケ
ージに預けたショーンが「一緒に連れて帰って」と悲痛な鳴き声で訴えていた。その声がずっと
耳に残って今も後悔しない日は一日だってない。アルツハイマー病や認知症の人はどうだろう。
まるでう人にあらずというような扱いを老人ホームなどの施設で受けている高齢者のが時
々テレビのニュースで流れる。それを見て心を痛めない人はいない筈だ。

母が最後に腸閉塞で入院したとき一冊の小さなノートに日記を綴っていた。口では私に忙しい
でしょうから毎日来てくれなくていいのよ、と言っていた母がノートには「今日は誰も来ない日
、淋しい...」と書いていた。母は献身的に介護する私に痛いだの、辛いだの、不安だとい
うような言葉を吐かなかった。終末期だと伝えられずにいた私への母の気遣いが感じられて、思
い出すと切なくなる。母もまた最期が近いことに気づいていて、それでも私や妹のために一日でも
長く生きようとしてくれていた。

アルツハイマー病の義母は入院していた一ヶ月間で表情がなくなり言葉を発することもなくな
った。本人に家に帰ると伝えても事情が良くわからない様子だった。もしかしたら自分の子供の
名前すら忘れているんじゃないだろうか、そんな疑問がわくほど義母は無表情で退院した。それ
でも前に書いたように、退院してからは時々好きなものは「おいしい」と言って食べてくれたし
、義父の私がままに私が「困ったお父様だわ」と言うと申し訳なさそうな顔をして見せた。病気
が進行していても決して感情がなくなったわけではない、そう確信していた。

我がままな義父も、人に対しては礼儀をわきまえるところがあって、機嫌の良い日には私や看護
士さんに向かって、「いつもすまないねー ありがとう」と言った。認知症が進んだ義父でさえ
理性を見せることがあったので、高齢でも、認知症でも、末期癌でも、人は最期まで人、だから
人として接してあげないとだめなんだと心からそう思った。

最初の質問にもどって、人は最期をどこで、誰と迎えたいだろうか。人は生まれてきた瞬間から
親に守られ大事に育てられて大人になった筈。そして亡くなるまでの長い人生を愛する人と共
に送ってきたのではないか。最期だけ一人になって良い筈がない。家族が見守る中で、或は家族

がいる住み慣れた家で、安心して最期を迎えることができたら、「良い人生だった」とそう思いながらこの世を離れることができると私は確信している。

介護する者が後悔を引きずらないためにも、誰もが在宅で、本当の意味の終の住処で、看取ることができたらいいと思う。それがきっと誰もが望む最期ではないだろうか。

生意気に書いてきた私も決して一人でできたわけではない。訪問してくださる先生や看護士さんたち、ケアマネージャーさんやヘルパーさん、義理の妹や夫、みんなの助けがあってこそできしたこと。高齢者の介護は赤ん坊の世話とはわけが違う。腕力や工夫も必要、資金も必要だ。高齢者を食い物にする業者がないとは言えない世の中だからこそ、皆が自分の最期を考え、最期を迎えている人の気持ちを理解することが必要だと思う。誰の未来にも、いつか自分の番が来て介護される立場になるのだから。